博士論文審査報告

大崎晴美「ドゥルーズの思想におけるスピノザとニーチェの同一性」

審査員　鵜飼　哲
岩佐　茂
恒川邦夫
審査日　２００３年７月７日

本論文はフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの思想を、哲学者自身が一九八八年に行った「スピノザとニーチェの偉大な同一性」の彼の思想にとっての決定的重要性という断言を出発点として解明することを目指したものである。

本論文は「序」と「結論」を除いて四部構成を取っており、第一部「同一性から差異へ」、第二部「差異から同一性へ」、第三部「身体と平面」、第四部「哲学、政治、宗教」となっている。その叙述は、哲学史研究から独自の哲学形成に至る一九六〇年代末までの第一期、フェリックス・ガタリとの共同作業を中心とする一九七〇年代の第二期、単独の著作活動に戻って芸術論を軸に展開する第三期という、ドゥルーズ自身による時期区分に則って進められる。

「序」においてすでに、差異の哲学者であるドゥルーズが語る「同一性」が素朴な意味での同一性ではなく、諸々の差異を含みそこから生成するものとしての「同一性」であることが指摘される。そして第一部では、スピノザとニーチェの思想の間に見られる「小さな同一性」と、それと同じ水準の「小さな差異」の確認がなされ、ニーチェがスピノザに対して熱狂的共感から激しい反発と非難に転じた理由が検討される。

両者に共通する哲学的姿勢は、第一に伝統的形而上学における意識の優位に対する身体の重視であり、第二に善悪のアプリオリな設定にもとづく伝統的道徳に対する異議申し立てであり、第三に精神を受動的態度から能動的態度に転換する方法の探求である。しかし、これら個々の課題に対するスピノザとニーチェの取り組み方は大きく異なっており、それが判明するにつれてニーチェのスピノザに対する評価は肯定から否定へと一八〇度転換した。両者の思想の差異は、第一に両者がともに衝動の重要性を認めつつも、スピノザが三段階の認識を通して衝動を克服し神を知ることを目指すのに対し、ニーチェにとって衝動と認識は最後まで不可分の関係であること、第二に、スピノザの思想が神即自然の有神論であるのに対し、ニーチェの思想は「神の死」の確認を不可欠な契機として持つ無神論であることに端的に見て取れる。論者はこれらの差異をドゥルーズがかならずしも明示的には扱っていないことを確認しつつ、彼がこれらの差異を暗黙のうちに踏まえ、それらを超えて両者を接近させていったという仮設に立って読解の作業を進めていく。

第二部で主要に検討の対象とされるのはドゥルーズによる二人の哲学者に関するモノグラフィ、一九六八年の『スピノザと表現の問題』と一九七〇年の『スピノザ』（第一章）および一九六二年の『ニーチェと哲学』（第二章）であり、これらと同時期に属する『差異と反復』（一九六八）と『意味の論理学』（一九六九）（第三章）である。ドゥルーズのスピノザ論の特色は、論者によれば、唯一の実体としての神がその本質を構成する属性を

介して無限に多様な様態によって表現されると考えることによって、伝統的神学と不可分な合目的性をスピノザの思想から徹底的に排除しようとしたことである。ニーチェが非難した個物の自己保存の努力であるコナトゥスに関しても、それが神の「力」への従属を意味せず、自らこの力を「分有」する限りで目的論的性格を持たないものとみなされる。そして道徳と区別されるスピノザ的「倫理」のもとでは、受動から能動への転換による「力」の増大が追求されることになる。ここに論者は、「力」が潜勢的なものにとどまらず必然的に現勢化することを本質とする以上、様態が実体に対し存在論的に劣位にあるとはみなされえないとするドゥルーズの解釈を読み取り、「力」という概念のこの強調を通してドゥルーズがスピノザをニーチェ的問題圏に引き込みつつ、両者に等しく妥当しうる「無神論」の再定義を行っていると主張する。

スピノザの思想うちにニーチェ的着想を読み込むこのような作業と相即的に、スピノザ論に先立つドゥルーズのニーチェ論では、スピノザ的着想にもとづくニーチェ思想の組み替えが行われている。それが端的に示されるのは Wille zur Macht と永遠回帰についての独創的な解釈である。通常「力への意志」と訳される Wille zur Macht をドゥルーズはあえて Volonté de puissance、すなわち「力の意志」と理解しているが、これはニーチェの生成概念をスピノザの変様概念に接近させ、ここでもまた、ニーチェの思想から目的論的傾向を除去することが目指されている。また、永遠回帰は通常「同じもの」の回帰とされているが、ドゥルーズはこれを「異なるもの」の回帰と読み変える。この論点もやはり、多様なものの絶えざる産出としてのスピノザ的実体の運動との牽引関係を背景に据えることによってよりよく理解される。

しかし、『差異と反復』ではドゥルーズは、神、その属性および様態の存在が同一の意味を持つとする「存在の一義性」の思想史上で、スピノザにニーチェと同等の重要性を認めていない。それはスピノザにおいてはなお様態が実体に依存しているとみなされうるためである。それに対し、ニーチェの永遠回帰思想はこの「存在の一義性」の思想の完成として位置づけられる。ここで論者が注目するのは、この文脈で、ニーチェのモノグラフィには見あたらない強度という概念が導入されていることである。事態はここできわめて錯綜する。というのも、スコラ哲学に由来するこの強度の概念は、ドゥンス・スコトゥスを介してスピノザがその表現論において発展させたものだからである。事実、『意味の論理学』で命題とそれによって「表現されるもの」の関係が問われる際には、「存在の一義性」の議論もまたそこに統合され、スピノザの属性概念との接合を梃子として、ドゥルーズの思想の核をなす出来事の思考が展開されるのである。こうして論者は、ドゥルーズの第一期の仕事の全体を通して、スピノザとニーチェの間のさまざまな「小さな差異」は無視されたのではなく、その徹底的な検討を通して「偉大な同一性」が浮かび上がってくると主張する。

第二期のフェリックス・ガタリとの二冊の共著、『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』は、ニーチェとスピノザの扱いについてきわめて対照的である。『アンチ・オイディプス』ではニーチェ的色彩の濃い欲望の概念が展開されているだけでなく、社会構成体の歴史がニーチェの『道徳の系譜学』を下敷きに構成されている。それに対し『千のプラトー』では、明らかにスピノザ的な着想のもとで、「リゾーム」「内在平面」「存立平面」などの概念が駆使されている。この時期のドゥルーズの思想の中心にはアントナン・アル

トーから受け継いだ「器官なき身体」の問いがあり、論者はスピノザとニーチェの思想もこの問いとの関連で再配置され、再解釈を受けたと考えている。そして、多なるものを肯定する限りで経由すべき一なるものとして、「存立平面」という新たな名称を付与されたスピノザ的実体は、多なるものがそこで融合する場として、「差し引かれる」一者という位置を与えられている。

第四部「哲学、宗教、政治」では、晩年のドゥルーズが、キリストの名にいくどか肯定的に参照した事実に注目し、キリストを「神の無限知性」として体系に組み込んだスピノザと、イエスの思想と実践を仏教的な「意志の無」に向かう運動ととらえ、自らは「アンチ・クリスト」を名乗ったニーチェとの距離関係が論じられる。この時期ドゥルーズはスピノザを「哲学者たちの王」「哲学者たちのキリスト」(『哲学とは何か』一九九一)とまで呼び、ニーチェ以上にスピノザへの傾斜を深めるが、一方で「概念の創造」「概念的人物」などの着想はニーチェに由来している。『批評と臨床』に収録されたメルヴィルの「書記バートルビー」を論じたエッセイ「バートルビー、あるいは決まり文句」(一九八九)では、こうした第三期の諸傾向が一つの融合へともたらされ、友愛、信頼、希望がキリスト教的徳に代わるものとして論じられる。雇用者の弁護士が友愛ではなく父性的な慈愛の立場で自分に接することを拒否し、最終的に一切の行為を停止して死んでいくバートルビーにドゥルーズは「新たなキリスト」を見るが、論者によれば、一見絶望的なこの小説の結末から彼は、彼岸への信仰ではなく、「この世への信頼」がそこから無限に湧出するような「意志の無」の再解釈を引き出すのである。そして、このバートルビーの死は一つの自殺でもある。一九九五年、ドゥルーズ自身が自ら命を絶つが、論者は哲学者のこの最後の行為を、以上のような晩年のキリスト像との関連で解釈する。

以上の展開を総括して論者は、ドゥルーズが語るスピノザとニーチェの「偉大な同一性」は、両者の間のさまざまな「小さな差異」の衝突を通して生じる相互的な生成変化によって初めてもたらされるものであり、この作業は哲学者の最晩年の作業にいたるまで続行され、キリストの再評価という意外な展開を含む新たな局面をつねに切り開きえたことにおいてその豊穣な思想的生産性を証明したと結論づける。

本論文は哲学史上の諸問題をしっかり踏まえつつ、その再検討からある独創的な思想が生成する過程をつぶさに追跡した点で注目すべき成果を挙げている。原文の正確かつ綿密な読解を通して個々の概念および論点の推移を丹念に分析していく手際は見事であり、またすでに膨大な量に達している近年の二次文献にも、とりわけ充実した注において周到な目配りがなされている。ドゥルーズの思想の多岐にわたる展開に一つの切り口から見取り図を与え、その思考の歩みの一歩一歩に即して局面ごとの哲学的選択の意味を問うという方法は、同時代の思想研究にきわめて斬新な道を切り開いたと言っても過言ではないだろう。その反面、この方法を貫いたことのいわば必然的な代価として、ドゥルーズの思想に内在するあまり論者独自の観点があまり提出されず、ややもすると祖述に終止する傾向がみられることは否めない。今回の論文で証明された緻密な論証力をいっそう研ぎ澄ましつつ、研究対象に対する批判的距離を自らのうちに作り出していく作業を、今後の課題として期待したい。

博士論文「ドゥルーズの思想におけるスピノザとニーチェの同一性」目次

序　差異の哲学者における同一性

第一部　同一性から差異へ

第一章　実践哲学におけるスピノザとニーチェの同一性
第一節　意識の告発と身体の重視
第二節　「善悪」対「よいわるい」
第三節　能動への移行
第四節　同一性における差異

第二章　二人の哲学者の間
第一節　共感と称賛
第二節　反発と非難（1）　―　認識と衝動に関して―
第三節　反発と非難（2）　―　衝動と愛に関して―
第四節　再び同一性への問い

第二部　差異から同一性へ

第一章　スピノザにおけるニーチェ的なもの
第一節　表現における合目的性の排除（1）　―　神の存在と産出　―
第二節　表現における合目的性の排除（2）　―　コナトゥス　―
第三節　”力”と無神論
第四節　接点に向けて

第二章　ニーチェにおけるスピノザ的なもの
第一節　”力”の意志と異なるものの永遠回帰
第二節　触発／変様の能力
第三節　永遠回帰における二つの側面

第三章　同一性の基盤
第一節　存在の一義性
第二節　強度としての”力”
第三節　永遠回帰と表現
第四節　一なるものと多なるもの、同じものと異なるもの
第五節　二つの時間、二つの回帰

第三部　身体と平面

第一章　器官なき身体と永遠回帰
第一節　内在的実体としての身体
第二節　永遠回帰における死の経験
第三節　系譜学の方法論
第四節　欲望か抑圧か、あるいは、過程

第二章　内在平面上の多様体
第一節　多様体の諸相
第二節　重層的な融合状態へ
第三節　n－1 の背景
第四節　内在平面と超越平面
第五節　生成変化の両義性

第四部　哲学、政治、宗教

第一章　哲学と政治
第一節　概念
第二節　内在平面
第三節　概念的人物
第四節　哲学の政治性と友

第二章 哲学と宗教
第一節　キリストをめぐって
第二節　友愛、信頼、希望
第三節　新たなキリスト
第四節　キリスト＝アンチ・キリスト

結論　自殺という生き方

凡例・文献表
別表

最終試験結果の要旨

2003年7月7日　　審査委員　鵜飼　哲
岩佐　茂
恒川邦夫

2003年7月7日、学位論文提出者大崎晴美氏に対し、最終試験を行った。本試験において、審査員三名が、提出論文「ドゥルーズの思想におけるスピノザとニーチェの同一性」に関して口頭試問を行い、主として提出論文の疑問点について説明を求めたのに対し、大崎晴美氏は十分な回答を行った。

よって審査員一同は大崎晴美氏が一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績を有するものと認定する。